汗に濡れつゝ

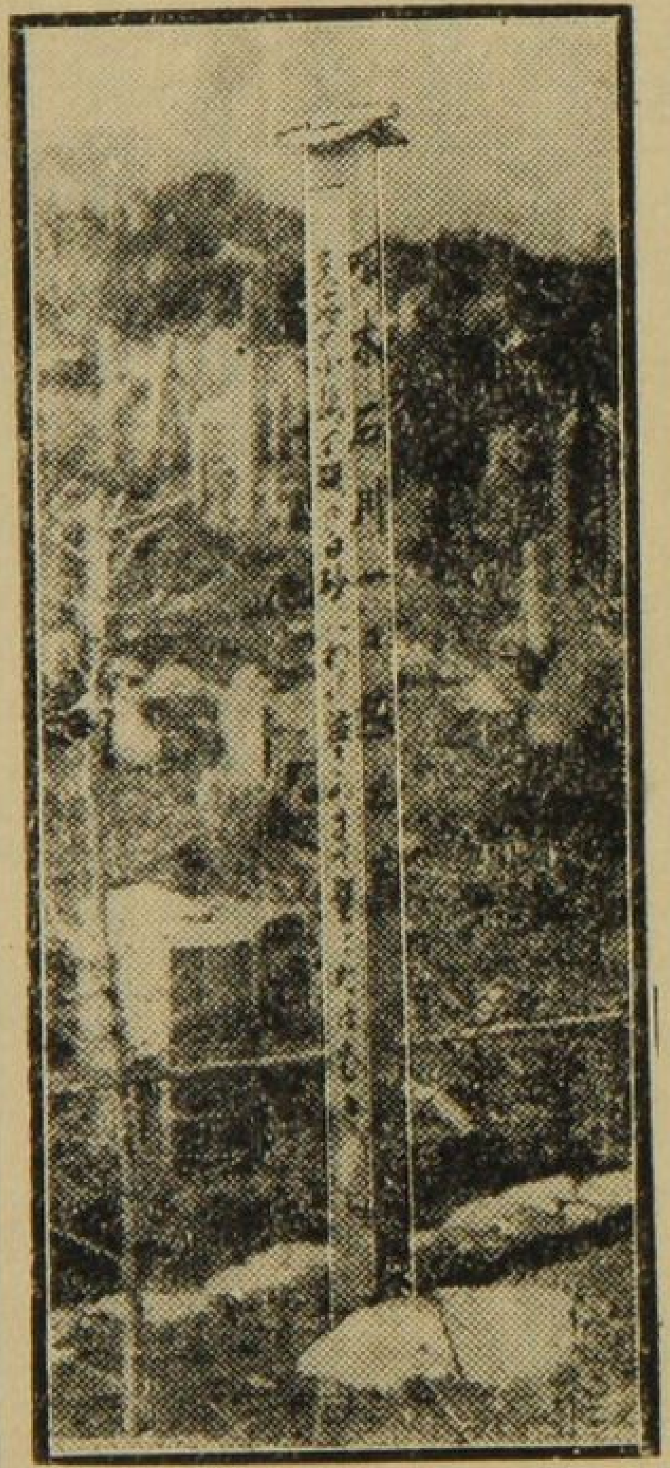
石川啄木著

啄木叢書
第壹篇

汗に濡れつゝ

石川啄木著

啄木叢書
第壹篇
—1925—
函館啄木會



大正二年六月二十二日
◇立待岬改葬◇
◇石川啄木之墓碑◇

小樽小記

啄木君逝いて十三年、今猶昨の如く、感慨の更らに新たなるを覺ふる、世の中には隨分永く交際をしても、歿後何等の印象を留めぬ人は多い、我が啄木君に至りては、二十年の交友中の出來事は、大小共に鮮かに眼前に彷彿する啻に啄木君一人のみでなく、お母さんもお奥さんも昔あつたことは見聞の限り、皆知つて居るやうな氣持がする、蓋しそこに作らざる啄木の歌が展開され、面目があり、又其の人格の現はれが窺はれる。

自分は昔函館日日新聞（舊めざまし）をやつて居た、啄木君は其の記者であつたり、寄書家であつたり、始終好意を承けた、尤も此の社から前には漢詩人として大久保湘南君が出て、後には我が啄木君が雄飛されたのは、新らしき記錄であらねばならぬ、當時或る人は予を仕拂はざる經營者であり、啄木は怠慢なる記者であると謂つたことを記憶して居るが、實は予は貧乏新聞社の經營者であり、啄木君は奔放自由の記者であつたのである。

啄木君は四十年の大火の後、仕拂はざる經營者より、白石義郎君の仕拂ふ新聞の小樽日報に行つた、此に某といふ主筆があつたのだけれども、啄木君は兎も角編輯局の中樞となつて働いて居た、當時予も小樽に行つて親戚の家に遊むで居た、一日啄木君が飄然やつて來て、今主筆と喧嘩をして來た、俺の頭を見て呉れと云つた、成る程大きな瘤が二つもある、啄木君呵々大笑して然かし痛快だなと他人のやうな顔をして居た、予は此の人全く善い男だなと敬服したことがある。

之は岡田君に素破抜かれたから白狀するが、小樽で或る晩豚會を開らいて何かの拍子に誰いふとなく、斯んなくだらない所より、一つ樺太に押し渡り南北樺太の境界標附近に、理想鄕を開かうといふことになり、予は總代となつて、時の長官楠瀨將軍を旅館に訪問したことがある、今でも一つ話になつて皆に冷かされる。

其の年も暮れて、啄木君は浪人となつた、滞りなく正月が來たが、紋付の羽織を有たない、其處で予は一枚の羽織を着て、回禮が濟むと啄木君の所へ置いて來る、啄木君が濟めば予の所へ置いて行くといふ風であつた、小樽の花園町の寓居は、小さい坂の下にあつて、窓には本を澤山積むで居たが、座敷の一部には疊が布いてない、便所へ行く時等は、下駄で板の上をがらん〳〵と音をさせる、然も主人公の啄木君は、客が一人來れば一人毎に、番茶を焙して入れ替へる、其の贅澤振りには個中に別天地ありとも觀られた、啄木君のお母さんお奥さんは善い人であつた、或る日臺所で甘い匂ひがした、來客の他の一人は喜むで御馳走があると、出さぬ先から禮を云つた、やがて卓の上に大きな卵燒きが並べられて、箸を取れの號令が下つたがまだ一つ足らないものがある、啄木君は例の茶焙しを振り廻はして居るので、其の友人はたまり兼ねてか、匇々飛び出して。一升壜をぶら下げて來たこともある。

二三日前岡田君から、啄木會で啄木叢書を出す、第一編は昔の日日新聞に出た「汗に濡れつゝ」であるから、其の因緣を以て特に何か書けとの申付

である、光榮之れに過ぎずとお承けはしたが、此の十三日に出すのだといふことであり、昨日の如き午後から三回も電話であり、一寸小樽時代を回想して、縷々の情を叙へたのである。

大正十四年四月六日　　遺友　大硯

汗に濡れつゝ

東京　石川啄木

一

◇かう毎日暑くては奈何なる事だらうと思ふ。土用入前から九十度以上の暑さの續くとは例年に無い事だと新聞にも書いてあつた。何しろ暑い、慾も得もなく暑い。朝起きて錢湯に行つて來て、新聞に目を通してゐると、もうチョロ／＼腋の下から汗が流れる。今日も盡日蒸されるのか！と思ふと、思つただけで何も爲る氣もなくなつて了ふ。

◇諸肌脱いで仰向に寢て、バタ／＼團扇を使つてる間は、少し活きた心地もしてゐるが、何時しか腕が疲れて團扇が動かなくなると、總身の毛穴から熱常風（シロッコ）でも吹き出す樣に、ボウッと熱くなる。胸の上に湧いてゐた汗が、胸骨の間の淺い谿合を傳つて、チョロリと背の方へ落ちて行く。右からも左か

らも落ちて行く。猿股がグッショリだ、氣味の惡い事この上もない。

◇アイスクリームはダラ〳〵と融けても猶多少の冷氣を藏してゐるが、暑氣に惰氣た人間には、何の味もない。意地も張もない。骨の無い海月にも、那の半透明な體に何となく「海の涼しさ」が籠つてるが、汗にネバ〳〵した人間の皮膚は唯汗臭い許りである。ふやけた體のあらゆる線がみな離れ〳〵になつてゐる。

◇春は女といふ女が若く血の氣多く愛すべきものゝ樣に見える。秋になれば男といふ男の顏にしまりか出て來る。どんな鈍間な男でもスィ〳〵と秋風が吹いて來れば、自と眉間に智慧の影が動く。冬には男も女も何かしら心待ちに待つてる樣

な眼付をしてゐる。

◇言つて見ようなら、夏の姿は弛廢の姿である、倦怠の姿である。大自然の活動がその旺盛の極に達した時、憐れな人間は肉體の弛みと精神の疲勞を抱いて、懶げな手付をして流る汗を拭いてゐる。鈍い眼、だるんだ肉、締りのない口、だらしない其格好は、融けかゝつた蠟人形の樣である。夏の生活は醜い生活だ。

二

◇若しもブツ〳〵と油汗の湧く皮膚の一片をとつて顯微鏡に照して見たなら、其處に倦み疲れた我等の人生の、飾らず僞らざる如實の姿か映るかも知れぬ。――あゝ、可厭なこつた。

◇開放した二階の窓から見下すと、下は弓町二丁目の通りで

ある。もとより繁華な通りではないが、種々の人が通る。皆暑さうである。就中暑さうなのは漆黒のフロックコートを着た紳士である。威儀堂々と反りかへり、肘を張つて眞白な扇を鷹揚に使ひ乍ら行く、御本人は立派に紳士の態度を保つてゐる積りだらうが、上から見てゐると扇を使ふ其手付が今にも踊り出しさうに見える。氣の毒乍らさう見える。一寸内衣嚢から金時計を出して見て、すぐ納つた手付は又手品師の様でもある。那の雪の様な高い襟の下は汗でネバ〳〵してるのだらうと思ふと一層氣の毒である。

◇向側の狹い路次から三十位の内儀が出て來た。波形模様の萎えた浴衣を諸肌脫いで兩袖を腹に卷き、肩に濡手拭を披げて掛けてゐる。髪は櫛卷である。眉間に皺を寄せて、如何にも暑くつて耐らなさうな顔だ。内儀は路次口の溝板の上に立つて、「マァ奈何でせう今日の暑いつたら、――可厭になつちやつた。」と眞實に可厭になつた様な聲で言つて、持つてゐる團扇を頭の上に翳した。對手は此處から見えないが、何れ此方側の家の者と話すのだらう。

◇内儀は二言三言話してから、體を投げ出したさうな格好をして、又路次の中へ入つて行つた。これから晝寢でもする積りなのだらう。――人間は遂に孤立の動物でない――考へて見ると今の下司張つた顔をした内儀の行つた事も仲々面白い。

◇暑いなら暑いで自分一人で暑がつてゐれば可い。何も態々出掛けて來て「暑い〳〵」と吹聽して行かなくたつて可ささうなものだ。いくら暑い〳〵と言つたつて流れる汗が一滴た

りとも少くなる譯ぢやないのだ。悲しいにしても嬉しいにしても然う、である。自分一人で泣いたり笑つたりしてゐても可さうなものだが、事實然うは行かぬ。屹度對手を求める。その對手に自分の思つてる通り思はせようとする。少くとも自分の思ふてる事を理解させようとする。思はせても理解させても自分には何の增減が無いに拘らず、屹度然うする。これは常に自己を表現せむとする人間の本能の一つである。本能といふ外に今のところ別に說明のし方が無い。

◇藝術制作の最初の動機を人間の遊戯的衝動に置くといふ說は、今迄美學者の殆んど全躰に認められてゐた。これは誰しも知つてゐる事である。シルレルの「遊戯動機論」の精神は美學の大成者と言はれたハトルマンによつて殆んど確定議と

された。

◇詰り藝術も亦一種の遊戯であつた。「かういふ藝術は無論今でもある。」ところが、此在來の美學は、最近三十年間に起つた種々の藝術上の出來事によつて、事實上最早何の權威も認められなくなつた。美學上の諸標準は今やもう何處へ持つて行つても當嵌らない。殊に小說や戯曲に於て然うである。我等が今日要求し、且つ幾分其要求を充たされつゝあるところの文藝上の作物は、その需要者のそれらを享受する精神狀態にこそ猶多少の遊戯分子が殘つてゐるもの、その制作上の動機乃至精神には毫もそれが無い。これは近代文藝の發達と、それを誘起した我等の內的生活の革命とに留意してゐる人の誰しも拒む能はざる所である。

◇そんなら、藝術に對する科學的研究――新しき美學といふ者の建設は全く絕望であるかといふに、決して然うではない、裏長屋の內儀を例に引くも可笑いが。自己表現といふ事に藝術の發足点を置く事によつて恐らく今後の新らしい研究が其基礎を得る事であらう。

三

◇今しがた一人の印度人が通つた。大學へ來てゐる留學生とかで、よく途中で見掛ける男である。背が高く、顏も手も白髮染で染めた樣に黑い。眞白な爪襟の夏服に、これも眞新しいヘルメツト形のパナマを冠つて行く、服も帽子も白いので顏と手が一層黑く見える。一寸考へると、熱帶國をなつかしい故鄕に持つた彼は、知る人もない異鄕の都會に、見た事のない雪に降られたり、着た事のない厚い衣服を着たりして暮してゐるのだから、夏が來て暑くなつたなら嘸々故鄕が忍ばれて嬉しいだらうと思ふが實際は然うでもないらしい。矢張暑さうに上衣の釦を脫し、時々眞白な白巾で眞黑な顏を拭き乍ら行く。手巾の黑くならないのが不思議である。

◇向ふ三軒兩隣とよく言ふが、此二階からは兩隣が見えない向ふ三軒だけ見える。三軒の一軒は車屋である。二軒は並んで何れも氷屋である。四寸許りの幅に赤い緣をとり、裾に鋸齒狀の刻目をつけた氷屋のフラフが、予の鼻先に、竹竿の尖に吊下つてゐる……そよとの風も吹かぬ、烈しい眞夏の光線の中にダラリと吊下つてゐる。死んだ物の樣に動かないが、赤い緣が日をうけて燃えてゐる。手を觸つたら燒け爛れさう

である。……如何にも夏らしい感じだ。氷屋の旗といふよりは「夏」そのもの丶旗章と言つた方が可いかも知れぬ。さうして此の「夏の旗章」には「氷」といふ字が書いてある。なんと面白いではないか。これも我等が平氣で看過してゐる趣味ある反語的事實の一つである。

◇眞向ひの店は加賀屋といふ。これは先月予が此處へ移轉して來た頃は一膳飯屋であつた。店には腰高障子を立て丶、それに「一ぜん飯」「酒さかなあり」など丶書いてあつた。それが先頃二三日の間、店を閉め切つて客が來ても斷つてゐる。どうしたのかと思つてると、或朝早變りをして氷屋になつてゐた。今は腰高障子の代りに硝子の管を繋いだ凉しさうな暖簾が下つてゐる店先には、細長い三臺の腰掛に赤毛布を掛けて

其上に夏坐布團が列べてある。

◇其隣は樂天舍といふミルクホールである。これは加賀屋よりも前から牛乳と兼業で氷を賣出したのだ。二軒共朝の十時頃から夕方まで客の絶える事がない。ゴス〳〵と氷を磨る音が盡日聞える。ゴス〳〵といふ音そのものは暑くも寒くもないが、それが氷の碎ける音だと思ふと、奈何やら凉しく聞える。少くとも暑苦しい感じは起らぬ。目を瞑つて凝乎として聞いてゐると、深山の奥で樵夫が大木の根を大鋸で挽いてゐる音の樣でもある。かと思ふと、だらしない態をした女が晝寢の目を覺まして、蚤に喰はれた腿の邊を手荒く掻いてゐる音の樣でもある。

四

◇動物に保護色といふ事がある。カメレオンや兎を例に引くまでもない。此動物の保護色と同じ現象が人間の生活の上にも見られる。廣く言へば四季の衣服の變化もそれであるが。東京の一膳飯屋、天麩羅屋、おでん屋などの輩が、夏になると爭つて氷屋になるなども面白い例であらう。加賀屋の亭主は學問はないかも知れぬ、が少くとも兎と同じ程度の生活上の智識を有つてゐる。

◇何の店にも常客といふものがある、如賀屋にもあつたに違ひない、それか俄に氷屋に豹變して其等の常客に飯を食はせぬ事になつた。一寸考へると加賀屋の遣方は自家の便宜のみ稽へた遣方であつて、德義上からは非難しても宜さそうである。又、その二十人なり三十人なりの常客中の一人や二人は

加賀屋で飯屋を罷めた爲めに餓死しても宜さそうである。(かう云ふと馬鹿氣て聞えるか、それは問題が卑近な爲である一應の理屈だけは立派にある、世上の堂々たる議論にも之と大差なきものが多い)ところが誰一人加賀屋が氷屋になつた爲に餓死した者は無い。餓死どころか、加賀屋で斷られたと言つて其晩飯を食はずに寢たといふ者もあるまい。然うして加賀屋の氷店には朝から晩まで客がある。

◇これで見ても解る。我等が書齊の窓から覗いたり、頰杖ついて考へたりするよりも人生といふものはもつと廣い、もつと深いもつと複雜で、そして、もつと融通の利くものである。僕は以前よく種々な人の人生論なんかを讀んだものだが、近頃ではトント手をつけたくもなくなつた。解つた樣な事を言

ふ人とは話もしたくない。

五

◇氷は冬の物である。それを夏になつてから食ふとは面白い事である。太古の人類は無論こんな事を爲なかつたに違ひない。家來に高山の巓から融け殘りの雪を持つて來さして食ふ位の事は爲たかも知れぬが、今の樣にして氷を食ふ事は知らなかつたに違ひない。それが段々人智が進んで來て、冬に出來た氷を、或る裝置（自然力の侵入を防ぐ爲の）をした庫の中に藏つて置いて、夏になつてから取出して喰ふ樣になつた。その次には、それをモ少し大仕掛にやつて來て賣出す事になつた。

◇所有權の無い氷を勝手に切出して來て、自然力以外の場處に隱して置く氷の貯藏者は、とりも直さず自然に對して贓物

隱匿罪をやつてゐる樣なものである。同じ言ひ方をすれば、氷屋も亦情を知つて其物を買ひ更に賣るのだから、自然の罪人たる事は拒れない。若し夫れ氷の需要者たる我等一汎人に至つてはその罪更に重い。自然は其一糸亂れざる運動を續けその愛する處の萬象を生育させんが爲に、時あつて暑熱を地上に投げる。所詮自然界の一生物に過ぎぬ我等人類は、矢張おとなしく其天地の大規に服從すべきであるのに、何の事ぞ氷を用ひて其暑熱を避けようとする。我等が氷を嚙んでゐる時は、則ち我等が自然に對して反逆してゐる時である。氷を嚙んで「あゝ涼しくなつた。」といふのは、取も直さず自然を嘲笑して遺憾のない聲である。更にその氷を嚥下し易からしめむが爲に碎片とし、味覺の滿足を得んが爲に砂糖とか檸檬（レモン）

とか密柑とかを調和して呑むに至つては、人間の暴狀も亦極まれりと言ふべしである。

◇更に近頃では、自然の製産を盗む許りでなく、其の力の一部分迄も盗み來つて、如何なる炎暑の日にも立所に氷を製造する者がある。これらは宜しく彼の旋風器の發明者と共に、電力盗用者、若くは會社の資金を流用して相場に手を出す手合と同罪に斷ずべきではないか。

六

◇かう言つて來ると、無暗に辻褄の合はぬ事を喋くつて喜んでる樣だが、人類文化の歷史は要するに人類が自然に對して試みてゐる反逆の歷史である、予は唯その反逆が極めて鎖末の事にも行はれてゐて、そして誰もそれを反逆と氣が付かぬといふ事に興味を有つた丈の事である。然り、唯興味を有つた丈である。

◇氷とは緣の遠い話だが、「十九世紀文明の最大功績は人工避姙法の發達なり。」と言つた西洋人がある。

◇種々の方面から考へて見るに、人間が自然に對して爲し得る反逆のうちで、此避姙といふ事程大きい反逆はない。生物の大目的は種の保存といふ事である。自然は此大目的を遂行させる爲に、諸有生物に姙娠といふ命令を下した。ところが此命令は餘程殘忍苛酷な命令である。自然も薄々それを知つてると見えて、此命令に成るべく穩しく服從させんとして、先づ歡樂を與へて誘惑する、そして其歡樂の最中に、不用意の間に人間をして其命令に服せしめる。默つて其命令に服す

るか、又は其命令を拒む爲に誘惑にも應ぜぬなら何の事もないが、幸か不幸か人間はモ些と賢い。

◇避姙なんて言ふと人は喫驚するが何も驚く事はない。避姙と墮胎とは別である。人間が單に子孫繁殖の道具としてのみ生きてるんでない限り、避姙は道德上の罪惡とも言へぬ。若しも自然律に對する反逆たるの故に罪惡とするなら、氷を飮むと全く質に於て同じ罪惡である。相違は量の問題に過きぬ。氷を噉む人は避姙を是認してる樣なもんだハハハハ。

七

◇筋向ひの車屋の十歲許りになる男の兒が面白い眞似をしてゐる。丸裸で繩暖簾の下に立つて、左手を腰にあてがひ、右に持つた澁團扇で隱し處を隱してゐる。何といふ滑稽な格好だらう。色の黑い醜い兒だ。

◇それについて一寸思出した事がある。昔の希臘の裸躰彫刻には、男の陰部に桑の葉(?)が一枚着けてあるさうだ。それは、その頃から旣に美術と風俗上の問題があつた爲めか、或は單に其部分の有無がその彫刻全躰の美に何の關係がないからといふ美術家自身の手心の爲か、或は又二者混同しての結果か、その邊の事は解らないが、兎に角無雜作な面白い事をしたものである。これは話に聞き本で讀んだ許りてなく、寫眞版などでも度々見た。流石は二千年後の今日まで保存された名作だけあつて、車屋の子供が變な手付で澁團扇を持ち添へてゐる格好とは無論くらべ物にならない。

◇ところが近頃或る處で、最近佛國畫壇て名ある作の寫眞を

見た、中に妙な畫が一枚あつた。(作者の名を今チョックラ忘れて二三度頭を捻つたが思出せない。)それは、一人の疲れた表情の年增女が桑の葉らしい物を一枚々々小川で洗つては、木と木との間に張り渡した繩に掛けて乾してゐる畫である。

◇初めは何を畫いたのか解らなかつたが、希臘彫刻の事を思出して、「フム、成程――」と思つた。そして其事を話して友人と笑ひ合つた、笑つたのは、解らなかつたのが解つたから可笑かつたのである。畫かれてある事が敢て可笑いのではない。

◇二千年前の古代希臘彫刻の犢鼻褌を、顔蒼ざめた近代の年增女か洗濯してゐるなんか、疲れ且癈れて猶且つ强き刺戟を需めて休まぬ近代人の官能を、餘り適切に、餘り露骨に現はしてゐて、笑ふにも笑はれぬ程奇拔である。

八

◇海と山――暑くなると誰しも海と山を思ふ。常に都會の榮華を想望し乍ら片田舍に朽ち果てゝ了ふ人の一生も哀れなものであるが、白兵戰の樣な都會生活の中に、汗にまみれて寢轉び乍ら、海と山とを思ふ男の心にも否み難き人生の冷さがある。

◇海といふと予の胸には函館の大森濱が浮ぶ。東北の山中に育つた予には由來海との親みが薄い。十四の歲に初めて海を見た。それは品川の海であつた。その時海は穢ないものだと思つた。その後時々海を見た。然しそれは何れも旅行先での事で、海を敬し、海を愛し乍らも、未だ海と物語る程親くはならなかつた。

◇一昨年、と云へば大火のあつた年である、臥牛山麓の花のまだ咲き初めぬ頃から、うすら寒い秋風の焼跡を吹き廻る頃まで、予は函館にゐた、その百二十餘日の間斷れ〳〵な日記は、予と海との交情のいかに厚かつたかを事細かに語つてゐる。情人「海」と予との媾曳は日毎の様にかの大森濱の砂の上で遂げられた。

◇その後小樽にもゐた。釧路にもゐた。然し小樽の海は、宛然成上りの富豪の細君の様に冷淡であつた。釧路の海は唯寒く唯寂しかつた。冬の最中の事である。あの廣々とした寥しい灣内に一隻か二隻の小さい汽船が頼り無げに碇泊してゐるのを、支廳坂の上から眺めやつて、思はず身慄ひした事がある。名にのみ聞いてゐた流氷が時々その灣を閉した。航海の

經驗は別として、予と海との關係はこれ丈である。去年東京に舞ひ戻つてから一年の餘になるが、予はまだ東京灣も見ない…………見る暇がない。

◇海と云ふと、矢張第一に思出されるのは大森濱である。然し予の心に描き出されるのは遠く霞める津輕の山でもなく、近く蟠まる立待崎でもなく、水天の際に消え入らむとする潮首の岬でもない。唯ムク〳〵と高まつて寄せて來る浪である。寄せて來て惜氣もなく、碎けて見せる眞白の潮吹である。碎けて退いた後の、濡れたる砂から吹出て、荒々しい北國の空氣に漂ふ強い海の香ひである。

◇あの音——(思出しても靈魂の土臺まで搖がされる様な氣がする。)ドヽヽと碎けて來て、ザーッと砂の上を這ひ上る。呀

と思ふと退いて行く。予はあの浪に足を嘗めさせるのが好だつた。碎ける浪の音——と言つた丈では足らない——力ある「海」の言葉は深く予の耳底に刻みつけられてゐる。

◇海が戀しい——これは予の浪漫的である。バザロフは四十幾つになつてギオロンセロを彈く友人の父を、轉げ歩いて笑つた、予も亦予の浪漫的を笑はねばならぬ。投げ捨てねばならぬと思ふ。思ふのは單にバザロフの眞似を爲ようとするのではない。が唯思ふ丈である。悲しいかな唯思ふだけである。

九

◇大森濱の浪穩かな、六月（一昨年）の或る日であつた。予は岩崎君——友人——と二人、とある砂丘の上に寢轉んでゐた。空霽れて日の光華やかに。砂は心地よく溫まつてゐた。何の話をしたかは忘れたが、然うして寢轉んでゐたのは三時間か四時間の長い間であつた。そして、その溫かな砂を掘つて二人は喰ひ殘しの大きい夏密柑を其中に埋めた。

◇二人は其間こんな事を思つた。「南國の山に熟んだ夏密柑を、北海の濱の砂に埋めるとは面白い事た。」と。……そして言つた。「溫い砂に埋めてやると、夏密柑は屹度南國の山の暖かさを夢に見るかも知れない。」

◇友人はもう此事を忘れたかも知れない。（忘れて然るべきである。）ところが予は今だに此小兒染みた戯れを忘れて了はずにゐる。

◇その頃の予は、然うだ、矢張若かつたのだ。今も若いがその頃はまだ〳〵若かつたのだ。それだけに、その頃の事を思

出すと何となく耻かしい。と共に懐かしい。

◇嚴然として充實し、而して、洞然として空虚なる人生の眞面目を、敵を迎へた牡獅子の騷がざる心を以て、面相接して直視するといふ事は容易に出來る事でない。直視するに堪へないからこそ、我等は常に「理想」といふ幻象を描いて瞞着してゐる。

◇その頃、天地人生に對して予は予の主觀の色を以て彩色し、主觀の味を以て調理して、以て、空想の外套の中に隱れてゐる自分の弱い心に阿つてゐた。一切が一切に對して敵意なくして戰つてゐる如實の事象を、その儘で自分の弱い心に突きつける事が出來なかつた。——今も出來ない。

◇詩！詩とは何ぞ？囈語ではないか——

◇我等はモツト早く目を覺まさねばならなかつたのだ。………夏密柑を砂に葬つて來た事を二三の友人に話すと、三四日經つてから其人達が散歩の序、その砂丘に立寄つて、標の木片を見付けて掘り出して見たさうだ、夏密柑は腐つてゐたといふ。然り、夏密柑は腐る物である。——

（自明治四十二年七月二十五日第五〇三五號
至明治四十二年八月五日第五〇四六號函館日日新聞所載）

啄木の遺孤等が成人するまでに、啄木の遺稿を整理して置きたいと云ふ願ひを、私は久しい以前から懐いてゐた。けれ共、日日の仕事に何時も追はれてゐる私の生活は、啄木歿後十數年の今日に至るまで、其中の唯一つをさへ能く爲ることを許してくれなかつた。而も遺孤は早くも成人して京子は今年十九歳、房江子は十四歳の春を迎へる樣になつた。

唯此の間私は、啄木の死後の知己であり私の親友である函館圖書舘主事岡田健藏君が、其の便宜多き業務上の立場から、故人に關する色々の作品や記述や資料などを、丹念に蒐集整理して、同館附屬啄木文庫の意義ある完成に努めて居らるゝ事と、友人武富安雄君（ペンネーム時鐘三郎）が昨年新歸朝當時の閑暇に際して、私の請ひを容れて「未だ世に出でざる啄木の歌」の抄錄に力を注がれ、それが略完了に近づきつゝある事と、及び函館啄木會同人並に周圍の人々の好意に依つて、啄木一族の墓碑が漸く完成しようとしてゐる事を見、獨り密に心の重い負擔から恕された樣な滿足を感じてゐる。

函館啄木會は毎年故人の忌日に追想會を催し、其都度何か故人に關係ある記念品を來會者に頒つ事にして居た。本册子は即ち今年の忌日に頒つべき記念品として企畫せられたものである。その之を廣く世の同好者に分ち或は續いて第二册、第三册を印行しようとするに至つた理由は、此の收入を以て或は墓碑建設費の一部を補ひ、若くは遺孤等を喜ばしむべき何物かを得ようかも知れぬと考へたからである。又數年の後遺孤等の心と其の名に依つて、其の亡き父の偉大なる遺物が、世間に贈り出される時を豫期して、斯くする事がそのためのよき準備なるべき事を私は心密に信じたからである。

私は此の機會に於て遺孤等に就て少し述べさせて頂きたいと思ふ。二人は兩親の歿後、啄木夫人節子の里なる堀合家に引取られ、其の祖父母の溫かき手に養まれ、祖母亡き後は不自由なる祖父の手一つに育てられて今日に至つた。京子は遺愛女學校の五年房江子は聖保祿女學校の一年に通つてゐるが、此の間の堀合氏の苦心は涙無くして考へられぬ。世間では二人の遺孤は故人の義弟に當る宮崎の手に依つて育てられたと考へてゐる人が多い。又左樣に誤り傳へてゐる新聞雜誌の記事を屢々見受けるが然しそれは間違ひである。獨り遺孤等の上ばかりでなく、啄木自身の事、啄木の周圍の事等に就ては、故人の名が大きくなつて來れば來る程、色々と誤つた事實が傳へられる樣に見える。殊にその書いた人から推して故意に間違へたのではないかと疑はれる事さへある樣に思ふ、何のために左樣なことになるのかは解らないが、兎に角可い事とは思はれない。——啄木及其の遺孤の事に關聯して私の妻の死が最近某雜誌で傳へられたために、弔詞やら香料やらを贈られて閉口してゐる。殊に私の友人の處ではその眞僞の問題で夫婦喧嘩をやつたと云ふ手紙をよこした。この雜誌は昨年も同じ樣な記事を載せた事がある。二度も紙上で殺された私の妻は其の漲る樣な健康を顧みて苦笑してゐる。——此の樣な悲喜劇は兎も角として、私は堀合氏のために遺孤等の事を訂正して置きたいと思ふ。京子は容貌のみでなく其の豊かな文藻の持主である所などは、よく父

啄木に似てゐる。房江子は寧ろ母親似の方で、その笑顔などは節子夫人を彷彿せしめる。堀合忠操氏の寓居は函館市富岡町六番地である。

第十四回啄木忌に先つ二日

宮崎郁雨

大正十四年四月十一日印刷
大正十四年四月十三日發行

啄木叢書

複製不許

定價 特製版 金五拾錢
普及版 金參拾錢

編輯兼發行者 函館啄木會代表者 宮崎大四郎

印刷者 函館印刷 白瀬由太郎

印刷所 函館市蓬萊町一〇三 函館印刷

發行所 函館圖書館內 函館啄木會